

患者中心の歯科医療への展望

～歯科技工士・歯科衛生士、それぞれの役割と魅力を再考する～

東京都歯科技工士会 小林 明子

今私たちは新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより未曾有の経験に晒され、世界中で環境や行動が一瞬のうちに変わってきてしまいました。そしてあらゆる健康面においても国民の意識や関心はかつてないほどの高まりを見せています。そしてそれは未知の生物との共存の時代への突入とも言われ、革新へのターニングポイントなのは間違えありません。それは歯科医療においても影響は避けることはできず、感染管理の面からも CAD/CAM 口腔スキャナーの需要はスピードアップしていくでしょう。

そして人生 100 年時代を見据えた今、歯科医療もこれまでの治療完結型主導の治療から、健康増進を見据えた医療へと確実にシフトしてきています。歯科技工士の製作する技工物は患者さんの健康を支えていく要のものであり、出来るだけ良い状態で航空の維持管理していくことが歯科衛生士に求められてきています。これから仕事なくなるのではと心配している歯科医師、歯科技工士の方からの声を聞かされますが、補綴治療はこれから第2波を迎えるのは必須です。私は歯科衛生士としてあるいは歯科技工士として目で患者さんと日々接し、歯周初期治療、補綴治療後のメンテナンスから多くの患者さんの口腔内の変化を日々痛感してきた中で歯科技工士、歯科衛生士それぞれの役割や魅力を再考しながら、患者中心の歯科医療への展望をお話したいと思います。私たちは患者さんへの医療貢献を実感した時に歯科医療の専門職として今以上にやりがいや誇りを得てまたそれが仕事の活力となっていきます。

明日からの歯科臨床が楽しみになるセミナーになる事を願います。

「生体と総義歯」

千葉県歯科技工士会 松平 浩

昨今、総義歯は著名な先生方が講演されレベルの高い制作方法が確立しつつありますが、まだまだ誰にでも簡単に出来るというレベルではないように感じています。同じように制作したつもりでも患者さんによってはうまくいかないケースも多々あるように見受けられます。勿論患者さん一人一人骨体、粘膜の厚みや水分量、顎位、舌位等同じ人はいません。そのような状態で同一技法を当てはめるのは至難の業と言わざるを得ません。

様々な技法や経験則の蓄積に解剖学を再確認し総義歯制作にモデファイヤーしていくことが必要ではないでしょうか。口腔内だけで完結していくことはどうしても未完となってしまふと感じております。頭位、顎位、体位等も診ていけると患者さん各個体に合った入れ歯になっていくのではないのでしょうか。そのための基本的解剖学や演者自身が義歯のための解剖として解剖学教室に通い解剖、計測などを行った資料を基に先生方が行う総義歯制作技法に今回発表させていただく内容を落とし込んで発展させていただけたら幸いです。

「人生 100 年時代 ICT の歯科展望」

千葉県歯科技工士会 枝川 智之

真の ICT は、デジタルとアナログの融合であると言われていています。
現在では、少人数のラボでも CAD/CAM の導入を検討する時代になっており、デジタルの恩恵を受けるための複合的条件や環境に考慮したシステムの構築の必要性、そして技術的には高透光性ジルコニアの需要に応えるべく、求められるクオリティーには歯科技工士の経験と工夫ある設計が不可欠である重要性をお話しさせていただきます。